

小学校におけるキャリア教育をめぐる9つの疑問にお答えします

なぜ小学校からキャリア教育が必要なのですか？

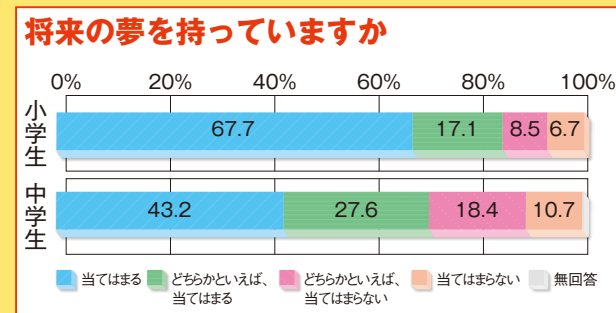
小 学校段階は、社会人として必要な自立性や社会性を育て、一人一人の子どもたちがそれぞれの進路を探索・選択する力を培う上で、重要な基盤を形成する大切な時期だからです。

ただし、小学校におけるキャリア教育は、具体的な将来設計を立てさせることを目指すものではありません。学級・学校・家庭・地域社会等における様々な活動を通して、将来設計の基盤となる「夢や希望」をはぐくみ、目標の達成を目指して工夫し努力することの大切さを体得させ、自信や有用感を高める機会を計画的に設けていくことが大切です。子どもたちが将来に不安を感じたり、学校での学習に自分の将来との関係で意義が見いだせず、学習意欲が低下し、学習習慣が確立しないといった問題が指摘される今日、キャリア教育の必要性はますます高まっています。

また、特に小学校では、豊かなキャリア教育の実践によって、家族や友達、身近な地域の人々への関心や信頼感を高め、多角的な視野から他者を理解するための基礎となる力を養い、人々が自らの責任を果たしつつ相互に支え合っている集団や社会を築いている事実を気付かせる必要があります。そして、子どもたち一人一人がそのような集団としての学校や家庭、ひいては社会の重要な一員であることを、実感を持って理解できるようにすることが重要です。

文部科学省による「平成20年度全国学力・学習状況調査」が示す次の結果も、小学校におけるキャリア教育の更なる充

実の必要性を示していると言えるでしょう。



「将来の夢を持っていますか」という設問に対して小学生の約68%が「当てはまる」と回答したのに対し、中学生では約43%と25ポイントも減少しています。この結果からは、心身の成長にしたがって、幼い頃に描いた夢が空想的であったことに気付くものの、それに代わる目標を見いだせずにいる中学生の姿が浮かび上がってくるようです。

小学校では、現実社会で活躍する多様かつ魅力ある大人に接する機会を設けたり、様々な職業の存在を気付かせたりしながら、広い視野から社会や職業をとらえる力を培いたいものです。空想的な夢に代わって、自らの将来につながる希望や目標を描くための力は、小学校からの継続的なキャリア教育によってはぐくまれるものではないでしょうか。

参考資料 小学校からのキャリア教育の重要性については、すでに様々な指摘が見られます。ここではその一例として『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—(平成16年)における指摘を引用します。

小学校段階から、発達段階に応じて、社会の仕組みや自己と他者あるいは社会の関係を理解できるようにするとともに、そうした理解の上に立って、自分の力で自分の人生をつくるのだという意識を持たせたり、仕事に対する責任感や強い意志を涵養したりするなど、将来の精神的・経済的自立を促したりするための取組を積極的に進めていく必要がある。こうした取組は、とかく無力感や閉塞感に捕らわれがちで、享楽や快楽のみを追う傾向のある現代の子どもたちの性向を改めていく上でも極めて大きな役割を果たすと考えられる。

キャリア教育の「キャリア」とは何ですか？

キ ャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議は、「キャリア」を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と定義しました(平成16年)。ここでは、特に重要な「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖」に注目して説明します。

このパンフレットをお読みの先生方も、「教員」として学校に勤務されると同時に、例えば、お子さんにとっては「父親あるいは母親」であり、「妻または夫」としての顔も持ち、ご両親から見れば「娘あるいは息子」であり、さらに「町内会の役員」や「ボランティアサークルの会員」ということもあるでしょう。こういった様々な立場や役割は、それぞれ相互に密接に関連し合い、また、生涯の中で多様に変容しつつ

連鎖とつながっています。これらの立場や役割の連鎖を総称して「キャリア」と言います。

子どもたちも、家庭において「息子や娘」であると同時に、「地域のスポーツチームの一員」などの立場や役割を持つ子もいるでしょう。また学校でも、「小学校3年生」であるにとどまらず、学級での「飼育係」としての役割もあるでしょうし、時には「給食当番」としての役割も果たしているかもしれません。現在、期待されるそれぞれの立場や役割にどのように取り組んでいるのか、それらを踏まえて将来の役割(上級生や中学生になってほしいこと・すべきこと等)にどのように取り組もうとしているのか。その時々、それぞれの立場や役割の重要性を自ら判断でき、また、それらに積極的に取り組むことができるよう、一人一人の成長・発達を支援することは、キャリア教育の重要な課題の一つです。

「キャリア教育は新しい教育活動ではない」と言われますが、これは「これまでどおりの教育でよい」ということですか？

文 いいえ、そうではありません。文部科学省による『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』(平成18年)には、「キャリア教育は、必ずしも新しい教育内容を導入しようとするものではない」と記されていますが、それに続けて、次のように指摘されていることを見落としてはならないと思います。

(キャリア教育は)教育活動の領域・単元の1つではなく、教育活動全体に働きかけていくという見方が大切である。小学校では、既存の教育活動のなかにキャリア教育と関連する内容が数多くある。それらをキャリア教育の視点でとらえ直すことで、それぞれの活動の関連が明確になる。学級担任がすべての教科を見渡しやすいという小学校の利点を生かし、キャリア教育の視点を意識して取り組むことが大切である。

小学校では、各教科や道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動において、子どもたちのキャリア発達を促す内容が多くあります。それらの機会を計画的に活用していきましょう。また、それぞれの教育活動の中に組み入れられてきたキャリア教育の言わば「断片」を振り返り、紡ぎ、つなげ、子どもたちの認識や視野を広げていく働きかけを、道徳の時間や学級活動、総合的な学習の時間などにおいていくことが大切です。

もちろん、学校や地域の特性、子どもたちの実情に応じて、新しい教育内容や活動を加え、キャリア教育をより豊かにする工夫もまた大切であることは言うまでもありません。けれども、まずは既存の教育活動をとらえ直し、その力を十分に生かすことが必要でしょう。



小学校でのキャリア・カウンセリングはどのようにしたらよいですか？

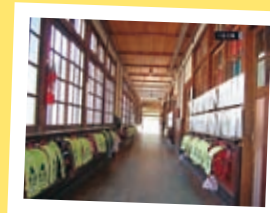
キ ャリア・カウンセリングという言葉から、中学3年時、高校3年時に行われる卒業直後の進路決定の相談を思い浮かべるとしたら、小学校ではほとんど実践する必要はないでしょう。実践に入る前に、キャリア・カウンセリングを正確に理解しておくことが大切です。

学校におけるキャリア・カウンセリングは、発達過程にある一人一人の子どもたちが、個人差や特徴を生かして、学校生活における様々な体験を前向きに受け止め、日々の生活で遭遇する課題や問題を積極的・建設的に解決していくことを通して、問題対処の力や態度を発達させ、自立的に生きていけるように支援することを目指しています。これはキャリア教育の目標と同じです。ただ、キャリア・カウンセリングは「対話」、つまり教師と児童・生徒との直接的なコミュニケーションを手段とすることが特徴です。

小学校でのキャリア・カウンセリングの実践は広義と狭義の両面から考える必要があります。

広義の実践とは、小学校がこれから続く学校生活の基盤として、学校や教師への信頼、そして学ぶことへの喜びを体験する大切な時期であるという認識に立って、教師がそれぞれの子どもたちの存在を尊重して温かい人間関係を築くことを意味します。子どもたちとの温かみで教育的な人間関係を築くためには、教師は一人一人の子どもとのコミュニケーションを図る能力を向上させることが不可欠となります。

狭義の実践とは、子どもたちが新たな環境に移行したり未経験の学習課題に取り組む際には不安も大きく問題を引き起こしやすいことを意識し、単に不安の解消や問題解決だけでなく、新たな環境や課題に勇気を持って取り組めることを目的とした個別の支援のことです。キャリア発達支援そのものと言えるでしょう。例えば、小学1年生は初めての学校生活に不慣れのために課題や問題を体験する時期ですし、どの学年でも学年始め・学期始めや学年末・学期末には新学年や新学年への適応で問題を体験する時期です。特に6年生は中学校進学という大きなステップを乗り越える準備のときでもあるので、中学校へ勇気を持って進めることを目指した個別支援は不可欠です。



よく「キャリア教育の視点で」と言いますが、この「視点」とは何か教えてください。

子 どもたちが、将来、社会的自立・職業的自立を図るためには、小学校、中学校、高等学校において、一人一人が発達課題を段階を追って達成していくことが重要です。キャリア教育の「視点」とは、将来の社会的自立・職業的自立を念頭に置きながら、子どもたちの成長

や発達を促進する見方を持つことです。小学校の各学年における様々な教育活動を通して、どのような資質や能力、態度を育てていけばよいのかを検討し、キャリア教育としてのねらいを意図的・計画的に設定していくことが大切になります。